

---

# 日本語版 ABbreviated Impulsiveness Scale の 信頼性と妥当性の検討

小 橋 眞理子 (立正大学大学院心理学研究科)  
井 田 政 則 (立正大学心理学部教授)

---

## Reliability and Validity of the Japanese version of the ABbreviated Impulsiveness Scale

Mariko KOBASHI (*Graduate School of Psychology, Ritsyo University*)  
Masanori IDA (*Faculty of Psychology, Ritsyo University*)

### Abstract

The ABbreviated Impulsiveness Scale (ABIS) is a short version of the Barratt Impulsiveness Scale 11th (BIS-11) used as a common scale of impulsiveness. The purpose of this study was to develop the Japanese version of the ABIS (JABIS) based on the ABIS, which consists of three factors: motor (4items), non-planning (4items) and attentional (5items) impulsiveness, and to examine its reliability and validity. 382 undergraduates (144males; 238females) participated in this research. Confirmatory factor analysis revealed that the JABIS had three factors like the ABIS. We obtained high coefficient by the test-retest reliability. To check construct validity, the relationship between the JABIS and other personality measurements related to impulsiveness was examined. Consequently, each of the three factors of the JABIS suggested its own impulsivity trait. These results show the JABIS can be used as a practical measure of impulsiveness in fewer items.

**Key words :** impulsivity, BIS-11, ABIS

キーワード：衝動性、BIS-11、短縮版 BIS-11

### 問 題

衝動性とは、「内的あるいは、外的な刺激に対して、拙速で無計画な反応を、自分や他人によくない結果を招く可能性を考慮せずに行う特性」(Moeller, Barratt, Dougherty, Schmitz, & Swann, 2001) と定義され、情動や行動の自己制御に逸脱した問題がある場合には、衝動性によって社会的・心理臨床的問題を引き起こす可能性がある。

Barratt (1959) は、衝動性をこのように臨床的な問題として捉えるだけでなく、普通の、いわゆる正常範囲にある人々をもつ一般特性として位置づけ、人々の衝動性を測定する尺度として Barratt Impulsiveness Scale (以下、BIS) を作成した。Barratt は、当初、この尺度における衝動性を一次元的にとらえ、その構成要因については今後の研究課題としていた。その後 Eysenck & Eysenck (1977) は、衝動性が狭義の意味での impulsiveness、risk-taking および non-planning という 3次元から構成されることを明らかにした。Barratt は、この Eysenck & Eysenck の研究結果を踏まえ、衝動性を多次元的なもの

のとして捉えるべく、尺度開発を行い BIS の改訂を重ねていく。この改訂により、Barratt (1985) は BIS-10 を作成するに至る。

BIS-10は、(1)運動衝動性 (motor impulsiveness) : 考えることなく行動する、(2)認知的衝動性 (cognitive impulsiveness) : 早い認知的決断、(3)非計画的衝動性 (non-planning impulsiveness) : 先見性の欠如、の 3 因子によって構成され、衝動性を多次元的に捉えた尺度である。なお Barratt は、Eysenck & Eysenck (1977) が示した要因 risk-taking については、社会性の関与が大きいとして、個人特性に位置づけられる衝動性の要因とはしなかった。

しかしながら、その後の追試研究により、BIS-10 においては運動衝動性・非計画的衝動性の 2 因子は確認できるものの、認知的衝動性は同定できず、問題があるという批判がなされる (Luengo, Carrillo-de-la-Pena, & Otero, 1991)。この批判に 대응するために、Patton, Stanford, & Barratt (1995) は、尺度を BIS-11へとさらに改訂する。この BIS-11は、(1)運動衝動性、(2)非計画的衝動性、(3)注意衝動性の 3 因子からなるとした。つまり、認知的衝動

性因子を注意衝動性という因子に変更することによって、3因子構造を確認したのである。

Moeller et al. (2001) は、改訂した BIS-11 を個人の衝動性と不適応行動との関連が測定できる有用な尺度であるとしている。このようなことから、BIS-11 は、改訂後 25 年間にわたり、衝動性を測る自己報告尺度として最も良く使用されてきた。また、世界各国で翻訳され尺度化されて、臨床場面でも研究領域でも幅広く使われてきた (eg. Litvin, 2010; Miller, Joseph, & Tudway, 2004)。ちなみに、心理学関連のデータベース『PsycINFO・PsycARTICLES・MEDLINE・Academic Search Premier』(EBSCO 社) において「BIS-11」の語で検索をかけると【検索結果: 1,281】件が表示される (2019年12月25日現在)。さらには、Barratt が BIS を開発してから 50 年目の年に、Stanford, Mathias, Dougherty, Lake, Anderson, & Patton (2009) によって、BIS に関する記念論文が上梓されている。この論文では、多くの一般の成人・学生・健康な人を対象に新たに調査研究を行ったその成果が示され、さらに多くの臨床例もとりあげられており、BIS-11 の有用性について改めて確認され報告がされている。

このように BIS-11 は、実証的な調査研究でも臨床的研究においても、これまで数多くの研究で使用されてきたが、その一方で、BIS-11 においても、運動衝動性・非計画的衝動性・注意衝動性の 3 因子が確認できないという結果が報告されてきた。例えば、Fossati, Barratt, Acquarini, & Di Ceglie (2002) は、イタリア語に翻訳した BIS-11 を使用した調査において、BIS-11 の 30 項目は一次因子分析において 6 因子に分かれたものの、二次因子分析では 2 因子 (General Impulsiveness・Nonplanning Impulsiveness) 構造となったと報告している。ちなみに、小橋・井田 (2013) では、改訂日本語版 BIS-11 は 22 項目からなる 2 因子構造 (運動的衝動傾向・非計画的衝動傾向) であることを明らかにしている。このような結果が生じたのは、イタリアあるいは日本という文化的背景が異なるからということも考えられるが、必ずしもそうとは言えない。アメリカ合州国でも尺度における回答結果に影響を及ぼす BIS-11 の因子の数とその質が重要な問題であるとの指摘がなされているからである (Coutlee, Politzer, Hoyle, & Huettel, 2014)。

Coutlee et al. (2014) は、BIS-11 の因子構造に関して一貫した結果が出ない主要な原因の一つは、因子分析の分析手法にあるのではないかとしている。BIS-11 が作成されたのは 25 年前であり、その当時においては、探索的因子分析への依存度が高く、必ずしも確認的因子分析の手法が用いられていたわけではない。そして、その後の BIS-11 に関わる研究では、探索的因子分析によるものと確認的因子分析によるものが混在していると述べている。また、Coutlee et al. は、BIS-11 を構成する質問項目の内

容も BIS-11 の信頼性を損ねているのではないかと指摘している (例えば、認知的不安定さ (cognitive instability) を測る “I have racing thoughts”、あるいは忍耐力 (perseverance) を測る “I change residences” など)。

そこで、Coutlee et al. (2014) は、BIS-11 の更なる改訂をおこなうことを目的に新たな調査研究を実施した。この研究では、彼らは、BIS-11 による衝動性の因子構造を再検討するために、探索的因子分析と確認的因子分析をおこない、BIS-11 に代わる ABbreviated Impulsiveness Scale (以下、ABIS) の開発を目指した。これは BIS-11 の短縮版となる。Coutlee et al. は、調査参加者として 1549 人の成人を対象者に BIS-11 を実施した。このデータを用いて、4 回の探索的因子分析、続いて 3 回の確認的因子分析をおこない、因子寄与率の低い項目や説明率の低い項目を削除しながら、最終的に (1) 運動衝動性 (4 項目)、(2) 非計画的衝動性 (4 項目)、(3) 注意衝動性 (5 項目) からなる 3 因子構造の尺度を作成し、これを ABIS モデルとした。このモデルにもとづく最終的な確認的因子分析による適合度は次のとおりであった:  $\chi^2 = 971.90$ ,  $df = 59$ : RMSEA = 0.059 (Lower 90% CI = 0.053 Upper 90% CI = 0.064): CFI = 0.972。このようにモデルの適合度指標は良好な値であった。すなわち、3 因子構造が確認された。さらに、Coutlee et al. は ABIS の信頼性と妥当性についても検討をし、これが十分であることを確認している。また、もともとの BIS-11 の質問項目数は 30 であり、ABIS では 13 項目となっており、より簡便な尺度開発がなされたことになる。

現時点で、ABIS の日本語版は見当たらない。そこで、本研究では、Coutlee et al. (2014) の ABIS モデルに基づく尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。前述したように ABIS は BIS-11 の短縮版である。昨今の調査研究においては、複数の心理尺度を組み合わせて、多くの概念間の関係を分析し検討することが一般的となってきている。そのため回答者の負担も重くなってきている。また、臨床場面でも、診断や相談のために複数の尺度・検査を用いることが多くなっており、ここでもクライアントの心理的・時間的負担は重い。このような回答者やクライアントの負担を軽減するために、短縮版尺度作成への要求は高まっている。そこで本研究で、日本においても BIS-11 の短縮版である ABIS が開発でき、これが利用できるようなになれば、このような要求に応えることになるであろう。

日本語版 ABIS を構築するために、本研究では、Coutlee et al. (2014) で示されている最終的な確認的因子分析の結果を採用し、その ABIS モデルにもとづく質問紙を作成する。Coutlee et al. と同様に、(1) 運動衝動性 (4 項目)、(2) 非計画的衝動性 (4 項目)、(3) 注意衝動性 (5 項目) をそのまま使い、3 因子構造の ABIS とする。質

問項目の日本語訳としては、小橋・井田（2013）の改訂日本語版 BIS-11 で用いた質問項目を使用した。なお、改訂日本語版 BIS-11 作成過程においては、原文質問項目の翻訳の際に、(1)英語に精通した日本人心理学研究者と検討・協議の上、原文質問項目について日本語訳文を作成 (2)アメリカ在住のカナダ国籍・日本人に依頼し、その日本語訳文の back translation を実施 (3)back translation 後の英文と日本語訳文とを、再度日本人心理学研究者とともに比較検討を行い、最終的な質問項目の日本語訳文を作成、という手順をふんでいる。

つぎに、本研究では、日本語版 ABIS の信頼性の検討をおこなう。信頼性については、まず、各因子の内的整合性を調べる。ついで、再検査信頼性のチェックをおこなう。そのために、第 1 回の調査に続いて、第 2 回目の調査を実施する。

さらに、日本語版 ABIS の妥当性の検討をおこなう。Coutlee et al. (2014) の ABIS モデルにもとづく、確認的因子分析を実施して因子的妥当性を検討する。ついで、構成概念妥当性を検討するために、日本語版 Dickman Impulsivity Inventory (以下、DII, 小橋・井田, 2017)・BIS/BAS 尺度日本語版 (高橋・山形・木島・繁樹・大野・安藤, 2007)、Redressive-Reformative Self-Control Scale (以下、RRS, 杉若, 1995) と、認知的熟慮性-衝動性尺度 (滝間・坂元, 1991) を使用する。日本語版 DII は、Dickman (1990) による DII の日本語版であり、衝動性の機能的側面と非機能的側面とを測定する尺度である。この尺度は、(1)機能衝動性 (Functional Impulsivity; 衝動的行動スタイルが最適となるときに先見なく行動する傾向)、(2)非機能衝動性 (Dysfunctional Impulsivity; ゆっくり几帳面に行動することができず、先見なく行動し、結果的に行為者を不利な状況に導く行動をとる傾向) の 2 因子構造からなり、その信頼性と妥当性が確認されている。したがって、ABIS で測定される衝動性とは、機能衝動性と負の関連が、非機能衝動性とは、正の関連が想定される。BIS/BAS 尺度日本語版 (高橋他, 2007) は、Carver & White (1994) による BIS/BAS 尺度の日本語版であり、その信頼性と妥当性が確認されている。本尺度は、(1)行動抑制系 (Behavioral Inhibition System; 以下、BIS) と(2)行動賦活系 (Behavioral Activation System; 以下、BAS) への感受性を測定するものであり、BIS は 1 因子からなり罰への回避傾向を意味する。BAS は、駆動・報酬反応性・刺激探求の 3 因子からなる。刺激探求は、新奇な刺激や報酬刺激に対して思い付きで接近しやすい傾向である。そこで本研究では、この刺激探求の因子を用いて、ABIS 衝動性との関係を調べる。刺激探求と ABIS 衝動性との間には正の関連が想定される。RRS は、セルフ・コントロールを測定する 3 因子構造の尺度である。この RRS の 3 因子は、改良型セルフ・コン

トロール (以下、改良型 SC)・調整型セルフ・コントロール・外的要因による行動のコントロールからなる。このうち改良型 SC を ABIS の妥当性検討のため使用する。この改良型 SC は、将来の結果を予測して満足遅延することで、より価値ある結果に近づこうとするために実行されるものとされ、ABIS 衝動性とは負の関連が予想される。さらに、衝動性とは逆の概念である熟慮性について測定するために、滝間・坂元 (1991) の認知的熟慮性-衝動性尺度 (人がある判断をするにあたり、じっくり考えて慎重に結論を下すかどうか) を使用した。

## 方法

### 調査対象者

調査対象者は、都内私立大学に在学の学生 382 名 (男性 144 名・女性 238 名、平均年齢 = 19.8 歳、 $SD = 2.0$ ) であった。このうち同意を得た 133 名 (男性 42 名・女性 98 名、平均年齢 = 20.0 歳、 $SD = 1.7$ ) が、後述する再検査信頼性検討のための調査対象者であった。

### 手続き

集団法による調査を実施した。報告バイアスを避けるため質問紙は無記名自己記入式とし、大学の授業時間内に、協力を依頼した上で配布し、調査対象者の回答後ただちに回収した。なお、回答前に研究の趣旨を説明し、調査への参加は自由であること、個人のプライバシーは保護されることを口頭およびフェイスシートにて教示した。

再検査信頼性を検討するために、第 1 回目調査のあと 4 週間の期間をおいて第 2 回目の調査を実施した。第 2 回目の調査対象者は、第 1 回調査時に調査参加への同意があった対象者とした。なお、匿名性を遵守しつつ同一対象者であることを確認する手続きをとった。

### 質問紙の構成

#### 1. 日本語版 ABIS 質問紙

まず、Coutlee et al. (2014) の論文原著者のうちのコレスポンディング・オーサーである Dr. Scott Huettel (Duke University) から、ABIS 日本語版を作成するための許可を得た。

日本語版 BIS-11 の 30 質問項目のうち、Coutlee et al. (2014) の ABIS に該当する項目をもって質問紙を作成した。したがって、日本語版 ABIS も 3 因子構造である。各因子は、運動衝動性 (4 項目)、非計画的衝動性 (4 項目)、注意衝動性 (5 項目) であった (Table 2 参照)。“1. 全くあてはまらない”から“6. まさにあてはまる”までの 6 件法で回答を求めた。

#### 2. 日本語版 DII (小橋・井田, 2017)

日本語版 DII は、機能衝動性 (8 項目)・非機能衝動性

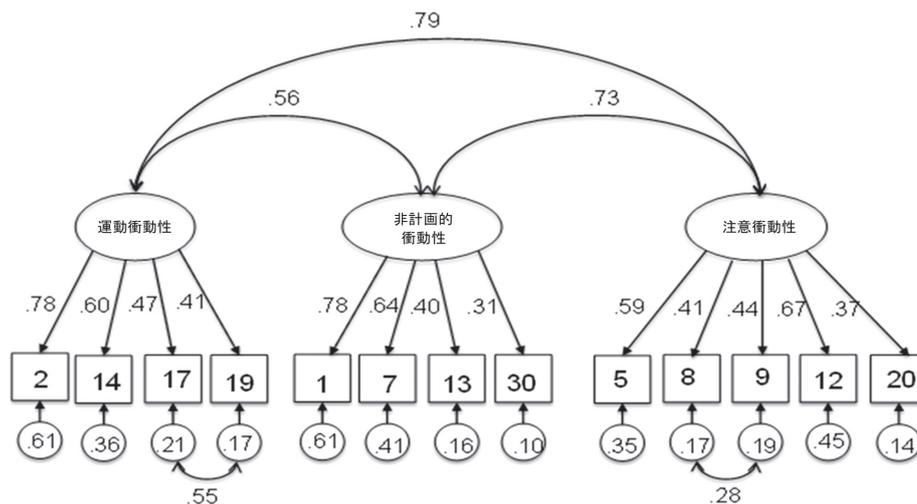


Figure 1 日本語版 ABIS の確認的因子分析結果モデル図

Table 1 日本語版 ABIS の確認的因子分析結果および適合度指標 (n=382)

	$\chi^2$	df	RAMSEA	RAMSEA		CFI
				Lower90%CI	Upper90%CI	
日本語版 ABIS	145.95	59	0.062	0.050	0.075	0.944

Table 2 日本語版 ABIS 質問項目

因子名	質問項目
運動衝動性	2 私は、何も考えずに物事を進める
	14 私は、考えなしにものを言う
	17 私は、まったく『衝動的』に行動する
	19 私は、突然の衝動にかられて行動する
非計画的衝動性	1 私は、仕事の計画を入念に立てる*
	7 私は、前もって、十分に練った旅行計画を立てる*
	13 私は、雇用の安定のために画策する*
	30 私は、未来志向である*
注意衝動性	5 私は、『細部まで気を配る』ことがない
	8 私は、自制心がある*
	9 私にとって、集中することは容易である*
	12 私は、じっくりと考える*
	20 私は、常に考え方が安定している*

\*は逆転項目

(8項目)で構成された尺度である。“1. 全くあてはまらない”から“6. まさにあてはまる”までの6件法で回答を求めた。

3. BIS/BAS 尺度日本語版 (高橋他, 2007)

BIS/BAS 尺度のうち刺激探求 (4項目) を使用した。“1. あてはまらない”から“4. あてはまる”までの4件法で回答を求めた。

4. RRS (杉若, 1995)

RRS は、改良型セルフ・コントロール (8項目) を用いた。“全くあてはまらない”から“まさにあてはまる”までの6件法で回答を求めた。

5. 認知的熟慮性-衝動性尺度 (滝間・坂元, 1995)

認知的熟慮性-衝動性尺度は、全10項目を用いた。“あてはまらない”から“あてはまる”までの4件法で回答を求めた。

Table 3 日本語版 ABIS の基本統計量 (n=382)

	平均値	SD	中央値	最小値	最大値
運動衝動性	3.260	.922	3.250	1.000	5.500
非計画的衝動性	3.499	.800	3.500	1.000	6.000
注意衝動性	3.193	.741	3.200	1.000	6.000

Table 4 日本語版 ABIS の下位尺度因子間相関 (n=382)

	運動衝動性	非計画的衝動性	注意衝動性
運動衝動性	—	.268**	.411**
非計画的衝動性		—	.435**
注意衝動性			—

\*\* $p < .01$ 

Table 5 日本語版 ABIS の各因子と他尺度との相関 (n=382)

		日本語版 DII		BIS/BAS 尺度日本語版	RSS	認知的熟慮性 - 衝動性尺度
		非機能衝動性	機能衝動性	刺激探求	改良型 SC	認知的熟慮性
日本語版 ABIS	運動衝動性	.659**	.156**	.444**	-.248**	-.473**
	非計画的衝動性	.276**	-.312**	.039	-.564**	-.349**
	注意衝動性	.514**	-.171**	.153**	-.519**	-.398**

\*\* $p < .01$ 

## 結果

### 1. 日本語版 ABIS の確認的因子分析

日本語版 ABIS の因子構造に関するモデル（運動衝動性・非計画的衝動性・注意衝動性の3因子）を確認するために、統計パッケージソフト SPSS/Amos18を用い、構造方程式モデルによる確認的因子分析を行った（最尤法）。その結果を Figure 1 に示した。日本語版 ABIS のモデル適合度指標を Table 1 に示した。Table 1 によると、CFI は 0.944 と十分な値であった。RAMSEA は 0.062 とやや高い値であったが、90% 信頼区間では 0.050 から 0.075 であったことから、十分な適合度だといえる。また、標準化係数は .31 から .78 の間にあり（いずれも  $p < .01$ ）、日本語版 ABIS のモデルは、適合度のよいモデルであることが示された。

各因子を構成している質問項目を Table 2 に示した。各因子の内的整合性を調べるために、Cronbach の信頼性係数を算出した。 $\alpha$  係数は、運動衝動性 = .731、非計画的衝動性 = .625、注意衝動性 = .673 であった。非計画的衝動性の  $\alpha$  係数はやや低かったものの、運動的衝動性および注意衝動性はおおむね高い内的整合性が得られた。

### 2. 得点化および基本統計量

上記分析から日本語版 ABIS の 3 因子構造が確認された。そこで、各因子を構成する項目の合計得点（逆転項

目の処理後）を算出し、それぞれの項目数で除したものを下位尺度得点とした。各下位尺度得点の基本統計量を Table 3 に示した。

### 3. 再検査信頼性

再検査信頼性を検討するために、日本語版 ABIS の 3 つの下位尺度得点ごとに、第 1 回調査 - 第 2 回調査間のピアソンの相関係数を算出し、それを再検査信頼性係数とした。その結果、運動衝動性  $r = .707$ 、非計画的衝動性  $r = .647$ 、注意衝動性  $r = .711$ 、日本語版 ABIS 全体  $r = .906$ （いずれも  $p < .01$ 、 $n = 133$ ）であり、おおむね高い再検査信頼性係数が得られ、尺度の安定性が確認された。

### 4. 日本語版 ABIS の下位尺度因子相関

日本語版 ABIS の 3 因子間の関連を見るために、ピアソンの相関係数を算出した。その結果を Table 4 に示した。それぞれの相関は、運動衝動性 - 非計画的衝動性間では弱い正の相関であり、運動衝動性 - 注意衝動性間、非計画的衝動性 - 注意衝動性間では中程度の正の相関であった。

以上の 1 ~ 4 の結果から、本研究で作成された日本語版 ABIS の因子的妥当性ならびに信頼性が得られたと判断した。

## 5. 構成概念妥当性

日本語版 DII、BIS/BAS 尺度日本語版および、認知的熟慮性-衝動性尺度は、それぞれの尺度構成に従い下位尺度得点を算出した。それらの得点と日本語版 ABIS の各因子との相関係数を算出し、その結果を Table 5 に示した。

Table 5 のように、運動衝動性は、(1)非機能衝動性および刺激探求との間に比較的強い正の相関、(2)改良型 SC との間に弱い負の相関、(3)認知的熟慮性との間に比較的強い負の相関を示した。運動衝動性は、考えることなく行動することである。したがって運動衝動性の高さは、衝動的行動傾向を示す非機能衝動性や新奇刺激への接近傾向と関連し、さらに熟慮性の低さと関連することからその構成概念妥当性が示された。

非計画的衝動性は、(1)非機能衝動性との間に弱い正の相関、(2)機能衝動性および認知的熟慮性との間に弱い負の相関、(3)改良型 SC との間に比較的強い負の相関、(4)刺激探求との間には相関を示さなかった。非計画的衝動性は、計画的に考えて行動することの欠如である。したがって、計画的衝動性の高さは、新奇刺激とは関連せず、満足遅延を示す改良型 SC および熟慮性の低さと関連することからその構成概念妥当性が示された。

注意衝動性は、(1)非機能衝動性との間に比較的強い正の相関、(2)改良型 SC との間に比較的強い負の相関、(3)認知的熟慮性との間に弱い負の相関を示した。注意衝動性は、注意力や集中力の欠如である。したがって注意衝動性の高さは、非機能衝動性の高さと関連し、改良型 SC および熟慮性の低さと関連することからその構成概念妥当性が示された。

## 考 察

本研究の目的は、Coutlee et al. (2014) の ABIS モデルに立脚する日本語版 ABIS を作成し、その信頼性と妥当性を検証することであった。Coutlee et al. の分析方法と同様に確認的因子分析を実施したところ、日本語版でも運動衝動性・非計画的衝動性・注意衝動性の3因子が確認された。適合度指標も良好であった。原版 ABIS と日本語版 ABIS の適合度を比較すると、次のとおりであった(ここに再掲する)。

原版 ABIS :  $\chi^2 = 971.90$ ,  $df = 59$  : RMSEA = 0.059  
(Lower 90% CI = 0.053 Upper 90% CI = 0.064) :  
CFI = 0.972

日本語版 ABIS :  $\chi^2 = 145.95$ ,  $df = 59$  : RMSEA = 0.062  
(Lower 90% CI = 0.050 Upper 90% CI = 0.075) :  
CFI = 0.944

上述のように、どちらの版も同じような数値の適合度を示し良好な値である。つまり、日米において ABIS モデルがデータを十分説明していることが明らかになった。

また、確認的因子分析により算出された因子からの標準化係数について両版を比較してみると、原版では、3 因子における標準化係数は .56 ~ .82 の範囲にあり (Coutlee et al., 2014)、日本語版でのその係数の値は .31 ~ .78 の範囲にある (Figure 1)。日本語版では若干低い値を示す係数もみられるが、どの係数にも有意性は確認されている。以上のことから、米国で開発された原版 ABIS は、日本においても再現されたといえる。

日本語版 ABIS の下位尺度・運動衝動性は、その標準化係数の値から判断すると、項目 2 「私は、何も考えずに物事を進める」・項目 14 「私は、考えなしにもの言う」に参与している。すなわち、この運動衝動性は、考えることなく行動することを意味する。Coutlee et al. (2014) の原版 ABIS では項目 2 と項目 19 がこれに当たる。つまり、項目 2 は両版で共通であった。非計画的衝動性は、項目 1 「私は、仕事の計画を入念に立てる (逆転項目)」・項目 7 「私は、前もって、十分に練った旅行計画を立てる (逆転項目)」に参与している。したがって、非計画的衝動性は、計画的に考えて行動することの欠如といえよう。原版 ABIS でも項目 1 と項目 7 がこれに当たり、日本語版と同一であった。注意衝動性は、項目 12 「私は、じっくりと考える (逆転項目)」・項目 5 「私は、『細部まで気を配る』ことがない」に参与していることがわかる。すなわち、注意衝動性は、注意力や集中力の欠如を示している。原版 ABIS では項目 12 と項目 9 がこれに該当する。

ついで、日本語版 ABIS のこれら 3 下位尺度間の関連性を検討する (Table 4)。その相関係数の値から判断すると、注意衝動性と運動衝動性および非計画衝動性との間に中程度の正の相関がみられる (いずれも  $p < .01$ )。また、運動衝動性と非計画的衝動性間に弱い正の相関が見いだされた ( $p < .01$ )。これらの相関係数の値から、各下位尺度は、それぞれが緩やかな関連をもちつつ、独立した要因でもあることがうかがえる。このことから、日本語版 ABIS は、心理尺度として良い尺度の一つであると言えるのではないだろうか。

つぎに、日本語版 ABIS ・下位尺度の信頼性について検討する。 $\alpha$  係数の値によると、運動衝動性においては、その値は .700 以上を示し、おおむね高い内的整合性がみられた。その一方、非計画的衝動性と注意衝動性では  $\alpha$  係数は .600 台でやや低かった。この結果は、一つには、下位尺度の項目数が少ないことに起因すること、また下位尺度を構成する質問項目の内容にも起因することが考えられる。非計画的衝動性では全てが逆転項目で構成されているうえ、仕事や旅行、雇用といった具体的な事象に対する計画性を聞いている項目と、未来志向といった漠然と未来に対して問うている項目とが混在している。このことが内的整合性の低さにつながったと考えられる。

なお、項目30「わたしは未来志向である（逆転項目）」は、改訂日本語版 BIS-11では、尺度作成の経過のなかで削除された項目であった。未来志向は、時間展望の概念として考えられるものであり、未来志向の欠如は自我拡散と関連することから（都筑，1993）、衝動性の特性としての計画性のなさ、すなわち非計画的な衝動性との関連は低いことが考えられる。このことから「わたしは未来志向である」という項目をどのように扱うかは今後の課題となろう。注意衝動性では5項目中4項目が逆転項目であった。しかし、残りの1項目は逆転項目ではないものの否定文となっている。逆転項目では非逆転項目に比べ、評定尺度の間隔に偏りがでる場合があり、また項目内容によっては回答者が認識する尺度表現の意味合いが変化することがある（脇田，2004）。したがって、今後、より内的整合性の高い ABIS の作成を目指すのならば、この点を考慮する必要がある。つぎに再検査信頼性について検討をする。日本語版 ABIS の再検査信頼性は、各因子の相関係数が .647～.711 の範囲にあり、また ABIS 全体では相関係数が .900 台で高かった。このことから、日本語版 ABIS の質問項目は個人の衝動性特性を安定して測定できると考えられる。以上、二つの下位尺度においてやや低い信頼性係数が示されたが、これも許容の範囲内と考える。したがって、信頼性について総合的に判断すると日本語版 ABIS は使用に耐えうる尺度であろう。

ついで、日本語版 ABIS の構成概念妥当性を検討する。下位尺度・運動衝動性は、(1)非機能衝動性および刺激探求との間で比較的強い正の相関、さらに(2)改良型 SC とは弱い負の相関、(3)認知的熟慮性とは比較的強い負の相関を示したことから、運動衝動性の妥当性が確認された。つぎに、非計画的衝動性では(1)改良型 SC とは比較的強い負の相関、(2)機能衝動性および認知的熟慮性とは弱い負の相関があった。したがって、非計画的衝動性の妥当性も確認されたことになる。注意衝動性では(1)非機能衝動性とは比較的強い正の相関、(2)改良型 SC および認知的熟慮性とは比較的強い負の相関があった。このことから、注意衝動性でも、一応の妥当性が検証されたとすることができよう。以上のように、要因間に想定された関連がそれなりにみられたことから、日本語版 ABIS は構成概念妥当性を有する尺度であるといえよう。

さまざまな心理尺度が開発され、複数の尺度を組み合わせることが研究において必須となっている現在、回答者の心理的・時間的負担や研究の広がりを見ると、今後、短縮版尺度の作成は重要な課題となってくると思われる。本研究では、衝動性を測定するための短縮版尺度・日本語版 ABIS を作成し、その信頼性と妥当性の検討を試みた。その結果、日本語版 ABIS はおおむね衝動性の特性を測定しうる再現性のある尺度であることが示された。本尺度は少ない項目数で衝動性を測定するという短

縮版としての役割を果たすことができる。そして、なによりも米国で作成された原版 ABIS が日本においても再現されたということは、日米の文化的差異を超え、共通に使用できる尺度開発がなされたことになる。このような日本語版 ABIS が作成されたことは、十分に意義があることといえる。

## 引用文献

- Barratt, E. S. (1959). Anxiety and impulsiveness related to psychomotor efficiency. *Perceptual and Motor Skills*, **9**, 191-198.
- Barratt, E. S. (1985). Impulsiveness substrates: Arousal and information processing. In J. T. Spence and C. E. Izard (Eds.), *Motivation, Emotion and Personality*. 137-146. Elsevier Science, North Holland.
- Carver, C. S. & White, T. L. (1994). Behavioral Inhibition, Behavioral Activation, and Affective Responses to Impending Reward and Punishment: The BIS/BAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.
- Coutlee, C. G., Politzer, C. S., Hoyle, R. H., & Huettel, S. A. (2014). An Abbreviated Impulsiveness Scale constructed through confirmatory factor analysis of the Barratt Impulsiveness Scale Version 11. *Archives of scientific psychology*, **2**, 1-12.
- Dickman, S. J. (1990). Functional and dysfunctional impulsivity: Personality and cognitive correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 95-102.
- Eysenck, S. B. J. & Eysenck, H. J. (1977). The place of impulsiveness in a dimensional system of personality description. *The British Journal of Social and Clinical Psychology*, **16**, 57-68.
- Fossati, A., Barratt, E. S., Acquarini, E., & Di Ceglie, A. (2002). Psychometric properties of an adolescent version of the Barratt Impulsiveness Scale-11 for a sample of Italian high school students. *Perceptual and motor skills*, **95**, 621-635.
- 小橋真理子・井田政則 (2013). 改訂日本語版 BIS-11 の作成：信頼性と妥当性の検討 立正大学研究心理学年報, **4**, 53-61.
- 小橋真理子・井田政則 (2017). 日本語版 Dickman Impulsivity Inventory の信頼性と作成 立正大学研究心理学年報, **8**, 63-70.
- Litvin, E. B., & Brandon, T. H. (2010). Testing the influence of external and internal cues on smoking motivation using a community sample. *Experimental and clinical psychopharmacology*, **18**, 61-70.

- Luengo, M. A., Carrillo-De-La-Peña, M. T., & Otero, J. M. (1991). The components of impulsiveness: A comparison of the I.7 impulsiveness questionnaire and the Barratt impulsiveness scale. *Personality and Individual Differences*, **12**, 657-667.
- Moeller, F. G., Barratt, E. S., Dougherty, D. M., Schmitz, J. M., & Swann, A. C. (2001). Psychiatric aspects of impulsivity. *American Journal of Psychiatry*, **158**, 1783-1789.
- Miller, E., Joseph, S., & Tudway, J. (2004). Assessing the component structure of four self-report measures of impulsivity. *Personality and Individual Differences*, **37**, 349-358.
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. (1995). Factor structure of the Barratt impulsiveness scale. *Journal of Clinical Psychology*, **51**, 768-774.
- Stanford, M. S., Mathias, C. W., Dougherty, D. M., Lake, S. L., Anderson, N. E., & Patton, J. H. (2009). Fifty years of the Barratt Impulsiveness Scale: An update and review. *Personality and individual differences*, **47**, 385-395.
- 杉若弘子 (1995). 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究 心理学研究, **66**, 169-175.
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁榊算男・大野裕・安藤寿康 (2007). Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討 パーソナリティ研究, **15**, 276-289.
- 滝間一嘉・坂元章 (1991). 認知的熟慮性—衝動性尺度の作成—信頼性と妥当性の検討 日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集, 39-40.
- 都筑学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- 脇田貴文 (2004). 評定尺度法におけるカテゴリ間の間隔について—項目反応モデルを用いた評価方法— 心理学研究, **75**, 331-338.